

sa to ya ma つう しん

さとやま い じ さいせい じつげん む

「里山の維持再生ゾーン」の実現に向けて

～市民協働による持続可能なまちづくりのモデルケースとして～

6月は、学研木津北地区「里山の維持再生ゾーン」の中で生息する貴重な生きもののうち 両生類 であるカスミサンショウウオとニホンアカガエルについて 紹介しました。今回は、絶滅危惧種の「オオタカ」を紹介 します。里山には、日々の生活のやすらぎの空間や、生きもの観察や野外活動など、さまざまな楽しみ方があります。みんなでこの環境を守っていきましょう。



オオタカ

オスよりもメスが大きく、全長はオスで平均 50cm、メスで平均 57cm。翼を開いたときの大きさは約 105 ～ 130cm です。繁殖期にはアカマツ林を営巣地とすることが多く、非繁殖期には河川敷や都市の緑地などに広く出現し、孤立林と狩り場に適当な農耕地に続く林縁部がセットになっている点が重要と考えられています。(参考/ レッドデータブック 京都府: 絶滅危惧種 環境省: 準絶滅危惧)

【オオタカがいることは豊かな自然の証拠】

オオタカの営巣地である丘陵地周辺は、開発などの影響を受けやすい地域です。また、オオタカのように鋭いくちばしと爪をもち、小動物や他の鳥を捕食する猛禽類は、食物連鎖の頂点に立つ種で広い行動圏を持つことから、一般に地域生態系の指標になるとされています。

オオタカが一番良く食べるのは中型のハト類です。また近年ではカラス類を食べることも多くなっています。オオタカの住む林には、羽をむしった痕が残っています。



アオバトの羽根（食痕）

【守るべき様々な環境】

生きものが生き続けるためには、生存や子孫を残していくための環境が必要です。オオタカが生息するには、オオタカの営巣できる里山が無ければ、オオタカは繁殖できません。また巣の周りだけを保護しても、餌となる狩り場の環境がなくなるとは、繁殖することができません。生きものが生息するためには、様々な環境がそろわなければなりません。

～オオタカの営巣について～

木津北地区では、平成5年から11年までの間、オオタカの営巣が継続して確認されてきましたが、平成12年から確認されなくなりました。要因としては、開発予定地であったことから、人的関与(耕作や森林管理等)が徐々に少なくなり放棄された耕作地や竹林が荒廃し、営巣当時にはあった良好な里山環境が衰退し、生息環境が減少してしまっただけが考えられます。

現在は、UR都市機構が、継続的に里山改善に向けた

様々な取組をおこなうとともに、代替巣となる人工巣を設置するなど、これまでから生息環境の改善に取り組んできており、平成20年には、ついに人工巣での営巣が確認されました。

また、人工巣内には監視ビデオカメラにより、貴重な映像記録にも成功しています。



みなさんへお願い

オオタカをはじめとする生きものには、今の静かな環境が必要です。巣の周辺には、舗装されていない林道など、自然のままの地形が多く残っています。自動車等の通行の際には、騒音等に注意してください。